

草に唐本注云、杉材木水煮汁、浸持脚氣、また本草圖經曰、杉材、醫師取其節煮汁、浸持脚氣殊効、唐柳柳州纂救三死方云、元和十二年二月、得脚氣、夜半瘡絕、脇有塊、大如石、且死、困塞不知人三日、家人號哭、榮陽鄭洵美傳、杉木湯、服半食頃、大下三次、氣通塊散、杉木節一大升、橘葉切一大升、北地無葉、可以皮代之、大腹檳榔七枚、合子碎之、童子小便三大升、共煮取一大升半、分兩服、若一服得快利、即停後服、按に本事方に載り、亦柳氏方を載たり、本草衍義に、杉作屑、煮汁浸洗脚氣腫滿とあり、また續門葉集雜上云、大藏卿隆博藥湯のために、杉の葉をこひ侍りける返事にそへ侍りける法印公紹。

君がとふしる亥ども又なりにけり杉のみたてる秋の山本、又按するに、藥湯のためにしてとあれば、これも脚氣ゆでん料にや、梶原性全の頓醫抄三卷脚氣云、凡脚氣ノ人ハ、家ニモチフルトコロノ桶杓ナラビニ、板ジキマデモ杉ノ木ヲ用フ、又杉ノ葉杉ノ木常ニ煎ジテ足ヲユデ、并ニ腫タラン處ヲユデヨ、キハメテシルシアリ、濟生方ニハユヅルコトヲ、イマシメタレドモ、ユデ、愈タルシルシ、オホクミエタリとあり、杉木の桶の事は、續博物志に、脚弱病用杉木爲桶濯足といへり、〔玉海〕治承五年三月六日壬午、泰茂來、又典藥頭定成來問余脚氣事、申云、暫不可加療治、只以行步可爲治、云々、申間等有其理。

〔醫學天正記乾下〕脚氣

一 菊亭右大臣晴季公、年六十餘 右腿脚筋痛 健歩丸 鹿角霜一分百二分 己蒼各二分 糊丸鹽湯
或酒一分 炙風市 三里 絶骨

〔五體身分集〕從股至足分

脚病治方、此疾ノ形種々有ト云、トモ最要ヲ取注ス、脚氣初テ發テ膝ハギ足カタ肘ヒイラギ痺脊
カハレ、腰滿テ推ニ指入テクボムヲ、療方、草麻葉刻テ春テ一升布袋ニ入テ、蒸テ温ニシテ痛ム所
ニ當ヨ、腫ルニモ好シ、三度カヘヨ、若草麻葉ナクバ或慧苡草、或蒴藋根ニ糟一分合テ蒸テ宛ヨ、